特集　防災

その時、どう動くのか。

自然災害大国、日本。国土面積は世界の0・25%ですが、地震の発生回数は、世界の18・5%（「令和元年防災白書」より）と極めて高い割合を占めています。また、急勾配な河川が多いことが特徴で、降った雨が山から海へと急降下し、洪水や土砂災害が起こりやすくなっています。

地球温暖化が与える影響も大きく、大気の気温が上がることで、大気中に含まれる水蒸気が増加し、雨の強度が増しています。一日の降水量が200ミリ以上となる年間の日数を「1901年から1930年」と「1990年から2019年」で比較すると、約1・7倍に増えています（気象庁より）。

今回の特集では、激甚化・頻発化する災害に備えて、自分や家族の命を守るための対策を考えていきたいと思います。

那須水害時の寺子地区
氾濫（はんらん）した余笹川と、流された寺子橋

水害で残された爪痕

本市を含め、本県は自然災害が少なく、比較的安全な県だと言われています。それは、内陸に位置していることから津波と無縁であることや、比較的強固な地盤を有していることによります。しかし、豪雨が引き起こす水害は、この地にとって実に身近なものとして、向き合わなければならない過去があります。

本市が最も大きな被害を受けたのは、平成10（1998）年の「北関東・南東北豪雨災害（那須水害）」。8月26日から31日にかけて那須地域を襲った大雨は、総雨量1254ミリという、年間雨量の7割が6日間に降る猛烈な集中豪雨でした。特に黒磯地区での被害が大きく、1人が亡くなったほか、那珂川や蛇尾川が危険水域に達し、余笹川と熊川が決壊するなど、最大約2千人もの人が避難所生活を強いられました。

平成27（2015）年の台風18号の影響による災害「関東・東北豪雨」では、人的被害はなかったものの、土砂崩れや浸水で建物に被害がありました。また、一時、790戸への給水ができなくなり、最大で6日間の断水となりました。

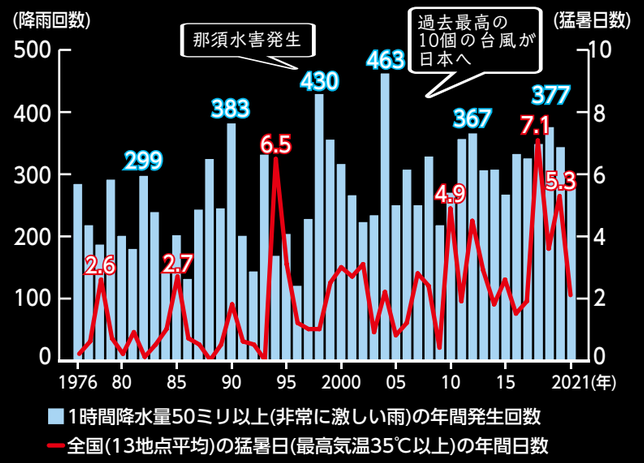
突如襲い来る悪夢

平成23（2011）年3月11日、前触れなく日本を襲った未曽有の大地震、「東日本大震災」。

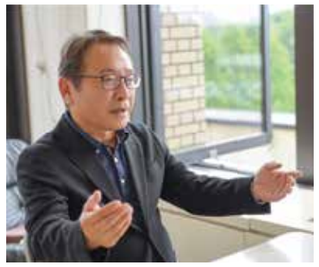
本市でも震度6弱を観測し、住宅が全壊するなどの被害がありました。地震発生後には電気や水道などが使用できなくなり、今まで当たり前だと思っていた生活が一瞬で奪われることを身をもって体験した出来事でもありました。

今、この瞬間に災害が起きたとして、私たちに何ができるでしょうか。自分と大切な人の命を守ることができますか。私たち人間には災害を止める力はありません。しかし、災害に備えて準備をすることはできます。ぜひ、この機会に家庭の災害対策を見直してみてください。

1平成27年の関東・東北豪雨により発生した土石流で土砂に埋まった家屋
2東日本大震災で被災した寺子小学校



自分や周りの人を守るために、日頃の備えを忘れないでほしい。



市消防団　藤田　英之（ひでゆき）　団長

消防団で30年以上活躍し、団長としては今年で4年目となる。本市の消防団員をまとめ、地域の安全のために日夜尽力している。

藤田さんが消防団へ入団した理由は「周りの人がみんな入っていたから」。それでも、地域での大きな火事や、豪雨による災害で救助活動を行う中で、「この地域を守らなければ」という気持ちが強く芽生えたそう。

消防団に入団後、さまざまな災害の現場に立ち会ってきた藤田さんは、「強く印象に残っているのはやはり那須水害と東日本大震災」と、現在までの活動を振り返ります。那須水害では、三日三晩寝ないで地域を巡回し、救助活動に努めたそうです。「東日本大震災では、東北3県で250人もの消防団員が亡くなったと聞き、ショックでたまらなかった」と、悲痛な面持ちで語ります。

那須水害から24年、東日本大震災から11年経ちます。「災害を経験していない人も今では多くいますが、日頃から備えておくことが何よりも大切」と藤田さん。年月の経過とともに災害の記憶が風化してしまったとしても、自分の命を自分で守るための対策は、今も変わらず必要であることを強く訴えています。